

読書感想文の深層

村松 史織

1. はじめに

読書感想文は、多くの子どもが経験する作文の一形態だと考えられる。しかし、読書感想文の書き方を学んでいないのに、なぜ読書感想文を書かせるのか、なぜ読書感想文を書く必要があるのか、という疑問があった。

教師が読書感想文とはいかなるものなのか、何を目的としているのか、などを理解していなければ、読書感想文指導はできないと考えられる。そのことが子どもが読書感想文に嫌悪感を抱く要因になるとも考えられる。実際に読書感想文は苦手という意見をよく聞く。しかし具体的に、読書感想文のどこに苦手意識を抱くのかは、漠然としているように考えられる。

本研究においては、読書感想文はなぜ子どもに嫌われるのか、を切り口とし、そもそも読書感想文はいかなるものなのか、ということを追究する。

2. 研究の概要

第1章では、読書感想文の実態の解明を行った。読書感想文の意義を、「作文指導」、「『読むこと』と『書くこと』の相互学習効果」、「人格形成」の三点から考察した。大学生を対象とする調査からは、読書感想文を苦手とする要因が大きく「作文が苦手」、「読書が苦手」、「読書感想文の書き方が分からない」の三つであると示唆された。

第2章では、読書感想文が嫌われる要因の考察を行った。「読書感想文の書き方が分からない」という苦手意識に焦点を当て、読書感想文指導本の内容と照らし合わせて苦手意識の根本的な要因を探った。読書感想文指導本には手立ては示されているが、「なぜ苦手だと感じるか」には言及されていなかったため、苦手意識の根本的な要素を考察した。その結果、「『正しい読書感想文』があるという誤解」、「『感想』という語の不明瞭性」、「『あらすじ』の不可避」の三つの要素が挙げられた。

第3章では、読書感想文コンクールの入賞作品200部を調査した。その結果、子どもが本を通して自分と向き合う姿を見出すことができた。そして、読書感想文の意義として次の二つが示唆された。「読書の深度をはかるための指標」と「自己の成長の過程を簡潔に示す記録」である。更に、読書感想文コンクールの審査に携わった方にインタビューを行った。その結果、「目を引く読書感想文はどのようなものか」といった、審査員の方の感覚的な要素を知ることができた。「書く側」と「評価する側」両者の考察を通し、読書感想文が自分を曝け出すものだという一面が見出されたと同時に、それに付随する問題点から新たな苦手意識が示唆された。

3. 研究の実際

3-1. 読書感想文に対するイメージの調査（第1章第2節より）

3-1-1. 調査の概要

調査の対象は、信州大学教育学部の学生 42 名（男子 16 名、女子 26 名）である。学年別の人数は、2 年生 35 名、3 年生 4 名、4 年生 3 名である。

調査の質問項目は以下の通りである。

【問 1】小学校「国語科」で行われている以下の活動について、あなたはどのような思い出や印象がありますか。自由に書いてください。

①読書感想文（②以下は略）

【問 2】小学校時代、あなたの読書生活はどのようなものでしたか。読書量・ジャンル・印象に残っている本・学校や家庭での読書活動・図書館等、覚えていることを自由に書いてください。

九つの項目を立て、調査結果から情報を抽出して表にまとめた。

3-1-2. 結果と考察

(1) 読書感想文の執筆経験

形式に関わらず、読書感想文を書いたことがあるという場合は「あり」、書いたことがないという場合は「なし」、記憶に残っていないという場合は「記憶なし」というように分類した。結果は以下の表の通りである。

【表 1】 読書感想文の経験の有無

	あり	なし	記憶なし
男(16)	14	—	2
女(26)	25	1	—
計(42)	39	1	2

男子は 87.5%、女子は 96% の人が、今までに読書感想文の経験があると答えた。全体の 92% が何らかの形で読書感想文を経験している。

読書感想文の形式を大別すると、A. 長期休み等の課題とされる長文形式のもの、B. 学校の授業の一環で行われる短文形式のものである。読書感想文を書いた経験があると回答した人のうち、A は 35 人で 83%、B は 4 人で 10% という結果が得られた。圧倒的に A の割合が多い結果であった²。

(2) 読書感想文のイメージ

調査用紙の自由記述から感情が読み取れる語を抜粋し、読書感想文に対してプラスの感情であるものを「良い」、マイナスの感情であるものを「悪い」に分類した。感情に関わる記述が無かったものは「不明」に分類した。

「好き」「大好き」「嫌い」「苦手」といったような直接的な感情表現をしているもの以外で、例えば「良い訓練になる」といったものはプラスの感情であると捉えた。一方、「大変」、「難しい」、といった表現で書かれており、更にそこからプラスの感情だと捉えられる言葉が書かれていなかったものはマイナスの感情であると捉えた。更に、「嫌いだったが、

1 「番号」、「専攻」、「学年」、「性別」、「読書感想文の経験・形式」、「読書感想文に対するイメージ」、「読書に対するイメージ」、「備考」、「好きな作家・好きなジャンル・好きな本」、の九項目である。

2 但しこの読書感想文が、コンクールに応募するものとしての扱いであったかどうかは定かではない。

好きになった」という感情の変化が見られる意見については、感情が変化したのは読書感想文に携わっていた期間内であると判断したため、これらは最終的な感情に当てはまる項目に分類した。結果は以下の通りである。

【表 2】 読書感想文に対するイメージ

	良い	悪い	不明
男 (16)	2	11	3
女 (26)	5	18	3
計 (42)	7	29	6

男女共に、読書感想文に対して「悪い」イメージを持つ人数が、「良い」イメージを持つ人数の約 5 倍であった³。直接確率計算では、有意であった。(両側検定 $P < 0.1$)

調査用紙から、読書感想文や読書に対するイメージ、思い出等について具体的に表記されたものを抜粋してまとめた。これらの中から、読書感想文に関わることを抽出した結果、読書感想文を苦手とする原因が大きく分けて三つあることが考えられた。

① 作文そのものが苦手

これに関連した回答をいくつか取り上げると、「文章を書くのが苦手」、「長文を書くのが面倒」などがある。これらは、読書感想文指導の枠に留まらず、作文指導という大綱を以てしても、子どもからは完全には排除し難い「苦手」の要素であると考えられる。

井上敏夫 (1982) は以下のように述べている⁴。

文章表現活動をいとなむということは、成人の段階でもなかなか億劫なものである。一般に、理解活動にくらべて表現活動は抵抗が大きく、表現活動の中でも書くという活動は、話すという活動にくらべて、はるかに抵抗が大きい。まして、言語活動のまだ少ない幼・少年期の児童が、書くことをめんどろに思うのは、当然のことである。

「書く」という活動に対しては、各々程度の差はあったとしても、「面倒」だと思ってしまう潜在的な意識があることを認めざるを得ない。また、その意識を指導によって完全に排することは難しいと考えられる。

② 読書に対する苦手意識

「読書が苦手だから、読書感想文も苦手である」や、「本を読まないため、読書感想文が書けない」という回答者が 5 名いた。ここから、読書感想文が読書を必須とする以上、読書に苦手意識がある場合、読書感想文にも影響を及ぼすということが考えられる。読書に積極的な姿勢を示している回答者の中には、「昔は読書が嫌いだったが、ある『きっかけ』を通して読書が好きになった」という回答が多く見られた。きっかけの内容は、友達やクラスの雰囲気、または両親、兄弟姉妹による影響や家庭の読書環境などであったが、その中に「読書感想文を書く際に読んだ本がきっかけ

³ 読書感想文に対するおよその感情の比率を認識するため、便宜的に分類項目を「良い」、「悪い」というように二項対立的に設定したが、各項目における感情に程度の開きはあるということをここで述べておく。

⁴ 井上敏夫 (1982) 『井上敏夫 国語教育著作集 5 作文教育の理論と実践』明治図書、p.20

で読書が好きになった」という回答があった。また、「読書感想文を書くために読んだ本が印象に残っており、今でもその本は大切な本の一つである」という回答もあった⁵。このことから、読書感想文が読書に対する積極的な姿勢を育む可能性が示唆されると考えられる⁶。ちなみに、「読書感想文を通して読書が嫌いになった」という回答は見られなかった。

③ 読書感想文独自の作文技術の必要性

「読書感想文の書き方が分からない」、「あらすじをなぞるだけになってしまう」、「本の感想を上手く言葉にすることができない」といった回答が見られた。これらは多くの読書感想文指導本にも対策が書かれているほど、定番となる苦手の要素であると言える。

以上が、調査結果から考えられる三つの苦手意識である。齋藤孝(2012)は、読書感想文が苦手な人は「書けない派」と「読めない派」に分かれると述べている⁷。ここでは、①と③は「書けない派」であり、②は「読めない派」とあるといえる。無論、読むことと書くこと双方に苦手意識を持つ人もいると考えられる。

3-2. 苦手意識の根源(第2章第1節より)

3-2-1. 「正しい読書感想文がある」という誤解

調査における回答に、「正しい読書感想文の書き方が分からない」というものがあった。ここで提起される問題点は、正しい読書感想文があると誤解していることである。これについては、ほぼ全ての読書感想文指導本(以下指導本)が指摘している。

「正しい読書感想文はない」というのが指導本における主張であるが、なぜ正しい読書感想文があると誤解されてしまうかについては述べられていない。誤解を生む要因として以下の二つが示唆される。

一つ目は、読書を推進する社会の風潮である。毎日新聞社が行った「読書世論調査⁸(2011年実施)」の中の「本を読むことは大切だと思いますか?」という問いに対する結果が次の通りである。

⁵ 読書感想文を書くにあたって読む本は、課題となる本がある場合と、自ら選ぶ場合があるが、今回ではどちらであったかは不明である。

⁶ 但し、読書感想文の型によって、受ける影響が異なると考えられる。例えばコンクール等の課題図書がある読書感想文であるならば、普段は自ら読まないような本に取り組み、新たな読書の世界を知ることと読書に対する興味を持つということが考えられる。一方、学校での授業の一環として行われる形式では、発表の場があった際に他者の読書感想文を読むことができるため、それによってその本を読みたいという読書への興味、関心が引き立てられるということも考えられる。

⁷ 齋藤孝(2012)『だれでも書ける最高の読書感想文』角川文庫,p.5

⁸ 毎日新聞社 HP 毎日.jp「読書世論調査」(2011実施)

<http://mainichi.jp/feature/news/20111027ddm010040182000c.html>

【表3】「本を読むことは大切だと思いますか？」（回答者数：2,521人）

	全体	男性	女性
①大切だ	61	58	63
②ある程度大切だ	33	35	32
③あまり大切ではない	2	3	2
④大切ではない	1	1	1

※数値は全て%表示

読書を大切だと捉えている人の割合が圧倒的に多いことがうかがえる。ここから、読書は大切であるという価値観が確立しているといえる。しかし多くの場合、読書が大切である理由を説明されることなく、読書をすべきだと刷り込まれている現状があるのではないだろうか。推進されるということは、「良いことだから」という解釈を一般的にはするであろう。ここで問題となるのは、本は自分にとって「良いもの」であるから、本を読んで読書感想文を書く場合には、「良い意見」を述べなければならないという観念が存在するという可能性である。つまり、本のどの部分にどのような感情を抱くのが「正解」であるかを無意識に考えてしまい、それにより自己の主體的な意見の芽生えや表出が抑制され、最終的に世間が求める「正しい」読書感想文に落ち着こうとする傾向があると考えられる⁹。

二つ目は、読書感想文自体が、他の形式の作文よりも圧倒的に経験する回数が少ないものであるということである。読書感想文は、先に挙げた調査結果からも分かるように、授業の一環であることは稀である。そのため、「何をどのように書くものなのかが分からない」といった経験不足あるいは教師による指導不足が露呈されるということである。

3-2-2. 「感想」の不明瞭性

(1) 「感想」の意味対象に関する考察

「本を読んだ感想を書く」というのが読書感想文の形式的な説明であるが、感想とは実に曖昧な概念である。紺野（2000）は、読書「感想」文は読書「感動」文であると述べている¹⁰。また、何かに感動したとき、人はそれを誰かに伝えたいものであり、その「感動¹¹」を文章化したのが読書感想文であると述べている¹²。

依田逸夫（2000）も、読書感想文は本を読んで受けた「感動」を書くものであると述べている¹³。まず依田（2000）は、その本を読むことによって心に浮かんだものが「感想」だと述べているが、その「感想」の中でよ

⁹ これには読書指導の在り方が大きく関係してくると思われるが、本論文においては読書感想文を書く際の読書の仕方ということに限定する。

¹⁰ 紺野順子（2000）『読むことは生きること 読書感想文の書き方』ポプラ社、pp.20-22

¹¹ 紺野（2000）の指導本の内容は、「いかにして感動を得るか」ということで半分以上が占められている。

¹² 紺野順子（2000）同上

¹³ 依田逸夫（2000）『読書かんそう文のかき方』ポプラ社、pp.53-68

り強く心に残ったものが「感動」であり、それが読書感想文を書く際に必要だと述べている¹⁴。

紺野（2000）、依田（2000）両者の見解から、読書感想文を書く際に必要なのは、本を読んではか「感動」を得たかであることがうかがえる。両者の指導本は、「感動」という語を強調しており、「感想」という語はほとんど用いられていない。

青少年読書感想文コンクールを主催している全国学校図書館協議会（以下SLA）は、読書感想文を「自分自身の記録であり、読み返すことによって、いつでも『感動した自分』に出会うことができるもの」だと述べている¹⁵。同組織は、読書感想文の書き方について以下の手立てを示している¹⁶。

読書感想文は、本を読んでの自分の思いや心の動きを中心に書くものですから、できるだけ自分のことばを使って書くようにしましょう。

（中略）本を読んで自分がどこに感動したのか、なぜ感動したのかを考えましょう。（中略）どう書けば自分の心の動きにぴったりするか、それがうまく人に伝わるかを考えましょう。

ここで注意すべきことがある。先ほど紺野（2000）は、「何かに感動したとき、人はそれを誰かに伝えたくなる」と述べていると記したが、3-1の調査における結果との齟齬が見受けられる。読書感想文に対してマイナスのイメージを持つ人の回答の中に、読書感想文が嫌いな理由として、「自分の感想を書くのが面倒」というものが複数あった。面倒という感情は、伝えたいという感情とは程遠いものである。しかし、この回答に見られた「面倒」という感情を、先ほどまでに得られた「感動」という語に対する知見と照らし合わせ、苦手の要因を追究した結果、以下の三つのことが考えられる。

一つ目は、本を読むことで「感動」を得られたが、その文章化が面倒だということである。これは文章表現への苦手意識であると考えられる。

二つ目は、そもそも当人にとって読書感想文が「感動」を綴るものだという認識がないということである。これは、仮に本を読んで得た「感動」があっても、読書感想文を構成する要素だとは知らず、「感想」という曖昧な語句に悩み、「感想」を書くのが面倒になったということである。

三つ目は、本を読んでも「感動」することができなかつた、ということである。これに関しては、本と当人との相性といった問題も絡んでくるものであると考えられる。そもそも読書感想文を書くためには本を読んで「感動」することが必要であるということはない¹⁷とされているが、「感動」は「感想」の中の最たるものである¹⁸ならば、本を読んでも何も感じな

14 依田（2000）の指導本は、テクニックを章立てしたマニュアル形式のものではなく、主人公が様々な人の助言や影響により読書感想文を書き上げるという物語形式になっている。

15 全国学校図書館協議会 HP
<http://www.j-sla.or.jp/pdfs/contest/honyomo.pdf>

16 青少年読書感想文全国コンクール HP
http://www.dokusyokansoubun.jp/q_and_a.html

17 宮川俊彦（2011）『読書感想文がラクラク書けちゃう本』小学館,p.30

18 依田逸夫（2000）『読書かんそう文のかき方』ポプラ社,pp.53-68

った、或いは記憶に留まったものがなかった、ということはすなわち「感動」がなかったと言い換えることが可能である。

その他にも、「本を読んでも気持ちを言葉にすることができなかった」や、「本当に書きたいことは言葉にできない」などがあつた。これらは一つ目のものに近いと考えられる。湧き上がった感情を言葉ではうまく説明できない、若しくは言葉にすることで陳腐になるのを危惧するゆえに、面倒になってしまうということにつながってくとも考えられる。

依田(2000)は、読書感想文に悩む子どもが抱く問題点として、「『感想』というものが理解できない」という点を挙げている¹⁹。これは二つ目の、「『感想』が指す内容が分からない」とであると考えられる。ここから、読書感想文を苦手とする原因が「感想」という語の不明瞭性にあるのではないかと考えられる。

(2) 「感想」と「感動」

まず、「感想」と「感動」のそれぞれの持つ意味を確認する。『日本国語大辞典 第二版』によると、「感想」は、

ある物事に対して心に感じ思うこと。また、その思い。所感。感懐。とある²⁰。一方、「感動」は、

①強い感銘を受けて深く心を動かすこと。

②人の心を動かしてある感情を催させること。

とある²¹。両者の語の意味を比べると、依田(2000)の言う「感動は感想の最たるもの」が、「感動」の一つの解釈だと考えられる。但し、これは「感想」と「感動」の関係性を分かりやすくしたものに過ぎず、「感想」と「感動」とは同じ性質であるとは捉え難いと考えられる。感動はいわば衝撃のようなものであり、上記の辞書の意味にもあるように「心を動かす」ものである。感想は、「感想文」という作文形式から考えると、文章化する一段階前の状態であると捉えることができ、まだ完全ではないが、何らかの感情に言葉を当てはめている過程であると考えることができる。

従って「感動」が起こり、それが「感想」へ変化していく、というように捉えられるのではないか。このことから、心の機微をいかに見過ごさず、心を動かす「感動」に気付くかが鍵になるといえる。同時に「感動」こそが、読書感想文の獨創性の一要素になると考えられる。同じ本を読んでも、得る「感動」は環境や経験によって千差万別であるといえるからである。

以上より、「感動」という概念を、読書感想文指導における一つの鍵として取り上げることは、「感想」というものをより具体的に想起させ、尚且つ唯一無二の題材とすることができると考えられる。

3-2-3. あらすじの不可避

(1) なぜ、あらすじを書くのか

調査結果において、「あらすじをなぞるだけになってしまう。」という回答が見られた。このことについても、多くの指導本が指摘しているが、

¹⁹ 依田逸夫(2000)『読書かんそう文のかき方』ポプラ社,pp.53-68

²⁰ 日本国語大辞典第二版編集委員会(2001)『日本国語大辞典第二版第三卷』小学館,p.1327

²¹ 同上,p.1354

なぜあらすじをなぞるだけになってしまうのかということを書かれていない。ここでは、その要因として考えられるものを二つ挙げる。

一つ目は、本の中で印象に残ったところがなかったため、最初から最後まであらすじをなぞる形式になってしまうことである。坂本一郎

(1956)は、読書感想文を書く際の本の「読み方」と、それに付随する読書感想文の「書き方」の類型を三つ²²挙げているが、そのうちの一つの「読み方」として、「本の紙面に印刷されている文章を正確に読み取る」というものがある。そして、この「読み方」に付随する「書き方」は、「単なる記憶の再現で留まってしまう」と述べている²³。本を読んだあとに心に残るものがなかったとしたら、その本の内容が記憶として残るばかりである。その場合、あらすじに終始してしまうという可能性が示唆される。

二つ目は、読書感想文にはあらすじを書かなくてはいけないという意識があるということである。調査において、以下のような回答があった。

友達の多くが「感想文」でなく、ただ本のあらすじを丸写ししており、先生もそのことについて何も言っていなかったので、私も(中略)皆に便乗してあらすじを丸写ししていた。それが正しいのだと思った。

この学生が、読書感想文にあらすじを取り入れるようになった背景には様々な要因があったと考えられるが、ここでは、なぜあらすじの必要性を感じてしまうのかという要因を考察していく。

(2) あらすじの必要感の要因

齋藤(2012)は、読書感想文には必ずしもあらすじを入れる必要はないと述べている²⁴。課題図書のある読書感想文コンクールでは、審査員は既にその本を読んでいるため、内容を説明する必要はないとしている²⁵。ここから、あらすじの必要性を感じてしまう要因が二つ示唆される。

一つ目は、自分の感想を書く際には、その感想の基となった内容を併せて書いておかなければ、読み手に正しく伝わらないだろうという危惧を抱いてしまうということである。これは、読み手を意識した故の結果であるとも捉えられるが、その意識が強すぎると、あらすじを多用してしまうといった傾向が見られるのではないかと考えられる。

二つ目は、自分の感想を書く際に、前置きの役割を担うあらすじが必要となる、若しくは本の内容に深く関わる感想を述べる際に、あらすじがないと不自然だ、あるいは書き出しにくい、といった心理である。齋藤(2012)は、感想を語る際に内容に触れる必要がある場合もあるとしているが、その場合は、あらすじを長々と述べるより、大事な場面だけを抜き出して「本

²² 本文中で取り上げたもの以外の2つの類型は、「本の文面から読み取った客観的な事実にもかかわらず、それによって触発された主観的な心理過程を書くというもの」と、「原文を読むことによって自分の心の中に浮かんだものを、まったく新しい自分の体験としてとりあげ、これを自分の第一信号系の意味として、自分の字の象徴技術を使って第二信号系に移すもの」である。

²³ 図書館教育研究会(1956)『読書記録の指導』学芸図書株式会社, pp.31-34

²⁴ 齋藤孝(2012)『だれでも書ける最高の読書感想文』角川書店, pp.95-98

²⁵ 査員の方に対するインタビューを行ったが、そこにおいても「課題図書を事前に読んだ上で、審査を行っている」という回答が得られた。

文引用」をする方が効果的であると述べている²⁶。そうすることで、引用と意見が明確に分かれ、めりはりのある文章になる²⁷と述べている。

以上より、あらすじに拘る要因が、読み手に正確に伝わるようにという「読み手意識」に関わることや、読後も印象に残ったところがなく、あらすじを書くに留まる、ということとも絡んでくることがうかがえた。

3-3. 読書感想文が嫌われる要因とその対応

大学生調査の結果と読書感想文指導本からの知見と考察を併せ、そこから見えてくる読書感想文が嫌われる要因とその対応の一考察を述べる。

①「正しい読書感想文がある」という誤解

要因 1. 「読書は良いものだ」という認識によるもの

1-1. SLA が読書の意義²⁸として提唱する、「本の中で様々なことを体験できる」、「疑問に思ったことを解決するために調べることができる」、「本を読んで新しいことを知ることで、驚きや喜びが得られる」ということを基に、読書がなぜ良いものかを示す。

1-2. 本に対して持つ考えや、それによって書く読書感想文に決まりはないということや、自分が思ったことを素直に書くことが読書感想文の意義であるということを示す。

要因 2. 他の作文形式よりも経験する機会が少ない

2-1. 日頃から読んだ本についての考えを書いたり述べたりする機会を設け、本に対して意見を持つという姿勢を身に付けさせる。

②「感想」の不明瞭性

要因 1. 「感動」が得られても、文章化することが煩わしい

1-1. 本を読んで心が動いたところや「感動」したところを他の人に紹介するという、読書感想文の効用を示す。そして、その「紹介」が、個性、独創性を持つものであり、価値を持つものだを示す。

要因 2. 「感動」を綴るものであるという認識がない

2-1. 本を読んで得た「感動」を、読書中に書き留めておく。

2-2. 書き留めた「感動」が、読書感想文を構成する要素であるということを示す。

要因 3. 本を読んでも「感動」することができない

3-1. 心が揺さぶられるような感情のみが「感動」ではないことを示す。読書感想文を書くことにおいては、自分の意見を述べるのが大切であるので、例えば「本に対して批判的に捉え、自分の意見を述べる」というような手立てを示す。

③あらすじの不可避

要因 1. 感想の基となった箇所を書くことの必要感

1-1. 読書感想文を読む審査員は、あらかじめ課題図書は既読であり、自由図書においても、同じ本を用意し、内容を把握しながら読書感想文を読むため、「あらすじを書かなければ感想の基になった部分は伝わらない」ということは起こらない、ということを示す。

²⁶ 齋藤孝 (2012)『だれでも書ける最高の読書感想文』角川書店,p.96

²⁷ 同上

²⁸ 公益社団法人全国学校図書館協議会 HP 青少年読書感想文コンクール
<http://www.j-sla.or.jp/pdfs/contest/honyomo.pdf>

要因 2. あらすじがないと、自分の意見を切り出しにくい

2-1. どうしてもあらすじが必要だという場合には、ただ本文を長々と引用するのではなく、端的に必要な部分だけを抜き出す、という方法を用いることで、自分の意見が際立つという利点も示す。

上記のみが、全ての子どもの苦手意識への対策になるわけではないが、これらを心得ておくことは、読書感想文指導において有意だと考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題として、以下の三つを挙げる。

一つ目は「読み手」を意識した読書感想文指導の方法を模索することである。コンクールに応募する際には「読み手」が存在するという前提がある以上、「読み手」を意識した作文活動を行う必要があると考えられる。

二つ目は、読書感想文指導の機会の捻出方法を探ることである。読書感想文に嫌悪感を持つ理由として指導不足が考えられる。授業時間内に取り入れることが難しいならば、日常の「書くこと」の活動を工夫することで、読書感想文指導ができるのではないか。

三つ目は、読書感想文に必要な能力の分析である。読書感想文の特異性は、本を読んで作文を書くことであり、読書に関わる能力は必須だが、入賞作品を考察する中で、自分の体験談を盛り込む力や、あらすじを効果的に要約する力、自分の意見を伝わりやすくする表現力、そしてこれらを組み立てる構成力、等のように、様々な能力の必要性を垣間見た。これらを踏まえると、読書感想文は、あらゆる作文に必要な能力を一極に要する、まさに作文の集大成ともいえるものではないだろうか。このような可能性を秘める読書感想文の指導を軽視することはできない。読書感想文の持つ教育的意義や魅力を模索し続けることが、今後の大きな課題である。

5. 参考・引用文献一覧

- 井上敏夫 (1982) 『作文教育の理論と実践』 (井上敏夫 (1982) 『井上敏夫国語教育著作集』 5, 明治図書, pp. 22-43)
- 今井誉次郎 (1956) 『教師のための作文教育法』 河出書房
- エイダン・チェインバーズ (2003) 『みんなで話そう、本のこと』 柏書房株式会社
- 倉澤栄吉 (1955) 『作文教育の方法』 新光閣書店
- 倉澤栄吉 (1972) 『これからの読解読書指導』 国土社
- 倉澤栄吉 (1989) 『倉澤栄吉国語教育全集』 4, 角川書店
- 倉澤栄吉 (1989) 『倉澤栄吉国語教育全集』 5, 角川書店
- 紺野順子 (2000) 『読むことは生きること 読書感想文の書き方』 ポプラ社
- 齋藤孝 (2012) 『だれでも書ける最高の読書感想文』 角川書店
- 阪本一郎 (1957) 『読書指導—原理と方法—』 牧書店
- 全国学校図書館協議会編 (2000-2012) 『考える読書 (第45回～第57回) 青少年読書感想文全国コンクール入選作品 小学校高学年の部』 毎日新聞社
- 図書館教育研究会 (1956) 『読書記録の指導』 学芸図書株式会社

- 外山滋比古 (2008) 『「読み」の整理学』筑摩書房
- 永田友市 (1992) 『文章表現の教え方 感想文から小論文まで』右文書院
- 滑川道夫 (1952) 「作文と教育 四月号」(『国語教育基本論文集成 8 国語科表現教育論 (1) 作文教育論 I』) 明治図書
- 滑川道夫 (1977) 『日本作文綴方教育史 1 <明治篇>』厚徳社
- 波多野完治 (1961) 『第二信号系理論と国語教育』明治図書出版株式会社
- ピエール・バイヤール、大浦康介訳 (2009) 『読んでいない本について堂々と語る方法』筑摩書房
- 飛田多喜男 (1984) 『国語科教育方法論大系 4 表現指導の方法』明治図書出版株式会社
- 平野啓一郎 (2009) 『小説の読み方 感想が語れる着眼点』PHP 新書
- 平山祐一郎 (2008) 『大学生の読書状況に関する教育心理学的考察』野間教育研究所
- 藤森裕治 (1997) 「読書感想文の学習指導に関する一考察—『羅生門』の読みの指導を通して—」(『読書科学』第 4 号, 日本読書学会, pp. 129-136)
- 増田信一 (1987) 『読書感想の指導』学芸図書株式会社
- 増田信一・朝比奈大作・米谷茂則 (2004) 『改訂版 読書と豊かな人間性』放送大学教育振興会
- 宮川俊彦 (2000) 『これできみも読書感想文の名人だ』三省堂
- 宮川俊彦 (2008) 『2008 年度版 読書感想文おたすけブック』小学館
- 宮川俊彦 (2009) 『とっちゃまんの読書感想文書き方ブック』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 宮川俊彦 (2010) 『読書感想文書くときブック』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 宮川俊彦 (2011) 『読書感想文がラクラク書けちゃう本』小学館
- 八木雄一郎 (2009) 「読書感想文問題史—『学校図書館』誌上における論争から—」(『文教大学国文』第 38 号, pp. 35-46)
- 吉岡日三雄 (2000) 『読書感想文の書き方・高学年向き』ポプラ社
- 依田逸夫 (2000) 『読書かんそう文のかき方』ポプラ社
- 依田逸夫 (1995) 『読書感想文の書き方 高学年向き』ポプラ社
- 米谷茂則 (2009) 『小学校上学年児童から中学生の読書の研究』現代図書
- 辞書・辞典**
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版第三巻』小学館
- ホームページ**
- 公益社団法人全国学校図書館協議会 HP <http://www.j-sla.or.jp/>
- 青少年読書感想文全国コンクール審査基準 HP
<http://www.iinan-net.jp/~tosyokan/konku-ru/sinnsakizyun.htm>
- 毎日新聞社 HP 毎日 jp 「第 57 回学校読書調査」(2011 実施)
<http://mainichi.jp/feature/news/20111027ddm010040182000c.html>
- 読売新聞社 HP YOMIURI ONLINE 「読書に関する全国世論調査」(2012 実施)
<http://www.yomiuri.co.jp/feature/fe6100/koumoku/20121021.html>

(むらまつ しおり 白馬村立白馬北小学校)